

7-1 準補語とは？

—— 文法上は必要でなくとも

1 取り除いても成立する補語が...

次の英文で第②文の意味と構造を考えてみてください。

- ① During World War I the United States was not damaged by fighting and did not lost millions of its citizens. ② The country came out of the war the strongest and most prosperous nation in the world.

* prosperous (形容詞) 繁栄している

この第②文の the strongest and most prosperous nation という名詞は文の要素 (主語・目的語・補語) のどれになっているのでしょうか？

→ The country came (out of the war)

S V

the strongest and most prosperous nation in the world.

?

Vであるcameは自動詞であるため目的語をとることはできません。もちろん、このthe strongest以下は主語であるThe country (= the United States) の状態を説明していることは明らかです。直訳は「その国 (= アメリカ) はすべての国の中で最も強く、最も繁栄した国という状態で、その戦争 (= 第1次大戦) を抜け出した」となります。

それでは、the strongest以下を主語を説明する補語 (C) として、この文をSVCの第2文型と考えていいのかというと、そうは言い難い面があります。p.044で述べたように、SVCならCを取り除いてしまった文は成立しませんが、ここではthe strongest以下を取り除いても、文法上、文としては成立します。

The country came out of the war. (○)

「その国は戦争から抜け出た」

このように本来、補語をとらなくても文法上成立する文に補語 (に該当する語句) がつくことがあります。取り除いても成立することから正式な補語とは言えないので、「準補語」または「擬似補語」と呼ばれています。(本書では「準補語」と呼ぶことにします)

【訳】「①第1次大戦中、アメリカは戦火を浴びたわけでもなく、何百万もの国民が犠牲になったわけでもなかった。②戦争が終わったとき、アメリカは世界中でも最も強大かつ最も繁栄した国となっていた」
さて、正式な補語同様、形容詞や名詞が準補語になります。

- He died **young**. ⇨ 形容詞「彼は若くして亡くなった」
- He came **an enemy** and returned **a friend**. ⇨ 名詞
「来たときは敵だったが、帰るときは友人となっていた」

これらの文では、太字部分を取り除いても文は成立します。

He died. (○)「彼は亡くなった」

He came but returned. (○)「彼はやって来て戻っていった」

2 取り除いてもいいなら、準補語はなくてもよい存在か？

ただし、取り除いても成立するといっても、こうした準補語はどうでもよい存在なのでしょうか？ 実はそんなことはなく、むしろ重要な情報を伝えているものと言えます。

- He was born **rich**.
「彼は金持ちの状態 で生まれた → 彼は生まれながらの金持ちだ」
この文からrichを取り除いた文は確かに英文としては成立しますが、情報としてはなんとも舌足らずな内容になってしまいます。
He was born. 「彼は生まれた」(それで?)

この文のいわば重点となる内容は「彼が生まれた」というより、「どういう状態で生まれたか」→「richな状態で生まれた」→「生まれながらの金持ちだった」ということにあります。したがって、形容詞richを取り除いてしまっただけでは、情報としてはほとんど意味を成さない文になってしまいます。先に取り上げた文でも同様です。

- He died **young**. 「彼は若くして亡くなった」

- He came **an enemy** and returned **a friend**.

「来たときは敵だったが、帰るときは友人となっていた」

これらの文から太字をとったものは確かに構造としては成立しますが、「彼が亡くなった」ことよりも、「亡くなったときの状態がどうであったのか」が重要な情報です。特に2つ目の文から太字部分を取り除いたHe came and returned. では、ただ「彼がやって来て戻っていった」ということです。何を言いたいのかわかりませんが、cameとreturnedのそれぞれにan enemyとa friendをつけることで、「やって来たときは敵だったが、戻るときには友となっていた」という重要な情報を伝えることができます。

「準」の字がつくからといって、重要度が劣るどころか、むしろ構造的には取り除くことができても、内容的には取り除くことができない重要な要素であると言えるのです。

3 目的格の場合も

準補語には、目的語となる名詞を説明する用法もあります。

- He eats fish **raw**. 「彼は魚は生で食べる」

この文からrawを取り除いたHe eats fish. はSVOとして文が成立すること、同時にrawはHeではなく、目的語fishの状態を説明していますから、「準目的格補語」と呼ぶことができるでしょう。

また、ここでもrawという補語は重要な情報を伝えています。つまり「彼が魚を食べるときは(焼いたりしないで)生の魚、刺身」であるということです。主格の場合と同様に、ここでもrawは情報な情報です。

それなら「rawという形容詞を補語ではなく、fishの前に置いても(He eats raw fish.) 同じ意味なのでは? わざわざ補語の位置に置く必要があるのだろうか」という疑問を抱く方がいらっしゃるかもしれません。しかし、その場合と補語に置く場合とでは伝える意味合いが違ってきます。He eats raw fish. (彼は生の魚(刺身)を食べる)では、「彼が焼き魚も煮魚も食べる」という可能性は除外されま

せん。つまり「生魚(刺身)を食べないことはない」という意味であるのに対し、He eats fish raw. では「彼が魚を食べるときは(通例)生」であることを暗示します。

- He eats **raw** fish. 「彼は生魚(刺身)を食べる」
⇒ 焼き魚も食べる可能性
- He eats fish **raw**. 「彼は魚は生で食べる」
⇒ 焼いたりしないで生で食べる主義である

次の文ではよく読まない誤解(誤読)が生じる危険性があります。

- He left his mother **quite well** last month, but she passed away soon.

「彼が先月母を健康にしておいたが、ほどなくして母は亡くなってしまった」(???)

→ 「彼が先月母のもとを去ったときには母は健康であったが、ほどなくして母は亡くなってしまった」(○)

His mother is quite well. という関係が成立することから、leaveはSVOCの第5文型をとっているように見えます。確かにleaveが第5文型としてOCをとる場合は「OをCのままにしておく」という意味になります(leave the door open = ドアを開けたままにしておく)が、ここでは「母親を健康にしておいた」という意味なのでしょうか?

このleaveはleave Tokyo (東京を去る)のように「...のもとを去る」というSVOの用法です。実際、quite wellを取り除いても、この文は正しい文として成立します。

→ He left his mother last month. 「彼は先月母のもとを去った」

もちろん、quite wellは主語であるHeではなく、目的語であるher motherの状態を表しています。つまり、「先月彼が母親のもとを去ったときの母の状態」が「かなり健康状態が良好であった」という意味になります。第5文型の〈leave OC〉のように見えますが、第5文型とすると意味がおかしくなることは上で述べたとおりです。したがって、leave Oの後ろに準補語であるCがついた構造と考える必要が出てくるのです。

4 準補語の「補語」の表す意味は「状態」のみ

p.044で述べたように、補語が表す意味は「主語の状態」と「主語が変化した結果」ですが、準補語の場合、文法上は取り除くことのできない正式な補語ではないので、動詞の意味系統は「...である」や「...になる」に分類することはできません。

- He **died** rich. 「彼は若くして死んだ」
☞ die ≠ 「である」「になる」タイプの動詞

また、主格準補語の場合は、補語の表す意味は「主語の状態」に限られます。

- He **came** home **deadly drunk**. 「彼は泥酔して帰宅した」
☞ 「彼が帰宅したときの状態」を説明

「帰宅した結果、泥酔状態になった」わけではありません。ただし、同じcomeでもp.048に示したように第2文型のSVCとして（正式な）補語をとるケースがあります。

- His prediction **came true**. 「彼の予言は的中した」
S V C

この場合、trueという補語は主語である「夢」が変化した結果を表します。また、この文ではtrueを取り除くと文として成立しなくなります。

His prediction came. (×)

このことから同じ〈come＋形容詞〉という構造でも2つの文の構造は根本的に異なることがわかります。

目的格の場合も同様です。

- I drink the coffee **black**. 「コーヒーはブラックで飲む」
S V O 準C
- You can buy the vegetable **fresh** at the store.
S V O 準C

「あの店に行けば野菜が新鮮な状態で買えるよ」

コーヒーを飲んだ結果blackになったわけでも、買った結果とし

て、野菜がfreshになるわけでもないので、これらの場合も準補語であるblackやfreshは、それぞれ目的語であるcoffeeやvegetableの状態を表わす「状態補語」です。

5 「準補語＝名詞」の場合は特に注意

準補語で注意が必要なのは、名詞が補語になる場合です。形容詞の場合と異なり、目的語と勘違いしたり、補語であると気づきにくかったりする面が出てきます。

- Let's part **friends**. 「友人のまま別れましょう」

動詞partには他動詞として「...を分ける」という用法もあるため、friendsを目的語と勘違いすると「友人を分ける、ばらばらにする」などと誤解する恐れがあります。

- Through bad management and selfishness he allowed his company to fail while his salary was raised; he retired from his job a millionaire.

「彼は誤った経営とわがままによって、会社を破綻させてしまう一方で、自分の給料は上げた。彼は職を退いたときは百万長者であった」

ここでもa millionaireは、「職を退いたときの彼の状態」を説明しているのですが、jobという名詞とa millionaireという名詞が並んでいるため、一瞬構造をとれにくい部分があります。

もちろんこの文でも、a millionaireという補語は重要な情報を伝えていることはおわかりだと思います。放漫経営で会社を傾けさせておきながら自分だけ高給をもらっていた社長である彼がどういう状態で職を退いたかは、この文の中でも最も重要な部分と言えます。

まとめ

- 「準補語」とは、本来補語を必要としない動詞が使われている文に付いて、名詞の状態を説明するもの
- 文法上取り除いても成立はするが、情報の上では大事な要素
- 表す意味は「状態」のみ（「変化した結果」は表さない）